【土木計画学研究・講演集 No.15(1) 1992年11月】

「奈良らしさ」を具体化させるためのプロセス*

Process of Identification -- Case Study in Nara

山田 正人**・明神 証***
by Masahito YAMADA & Sho MYOJIN

We have got a chance to concern about "NARA*rashisa*", which seems to have meaning just same as so called identification of "NARA". It seems to be an important point of view, not to disturb the good image of "NARA", when some new facilities are designed. In a designing process, we have tried to summarize a practical image of "NARA", from geographical, historical and folklore point of view. We have collected words as elements of image and overlooked, abstracted, compared and tried to compose the Architecture of "NARA*rashisa*".

We have found that not only the concepts of designs but also motif, motive on design, must be important. Also to evaluate the incentive and/or the inducement and to make up the Architecture.

1．問題の所在

「奈良」を素材に、「・・・らしさ」をどのように把握していけるかを検討する機会をえた。もちろん、計画や設計にどのように「・・・らしさ」を反映できるかが、最終的な目的であるが、そこにまでは踏み込んでいない。

なぜ「・・・らしさ」を設計や計画に反映しなければならないかは、いまさら、筆者ごときがふれる必要があるかは疑問であるが、問題の性格上、一応説明を試みる。

結局、「・・・」が、いかにインセンティブ(incentive)を与えるかが問題となろう。そのための手段の一つがアイデンティフィケーション(identification)と呼ばれるもので、ここで言う、「・・・らしさ」を反映すること、に最も近いのではないかと考える。

インセンティブとは、向上を促すもの、報酬とも、また、経済学上の意味もあるが、ここでは、素直に（向上を志向した、現象の）誘因としておく。アイデンティフィケーションとは、本来、一致を意味するが、ここでは、知覚される環境と、行動の誘因となる人間に取り込まれた環境すなわちイメージ1*)、の一致を指す。

さて、「奈良」のようにすでに誰もが知っていると、固定され尽くしたようなイメージを有するだろうか？「・・・」において、いかなる「・・・らしさ」がインセンティブを与えるのか。あるいは、アイデンティフィケーションが有効な手段なのか。

ここでは「・・・」の構造的把握といくつかの用語について定義し、「・・・らしさ」と「・・・」との対応関係から「・・・らしさ」の条件について考えた。さらに、「・・・らしさ」を具体化するた

*ｷｰﾜｰﾄﾞ:地域イメージ　アイデンティティー
**正会員　工修　岡山大学工学部助手　土木工学科
***正会員　工博　岡山大学工学部教授　土木工学科
（〒700　岡山市津島中3-1-1）

めに俯観、抽出、対比、合成の４つの段階について考える。

２．「奈良」の構造的把握

２－１　いくつかの用語の整理

この研究の目的はいかにして「奈良」にふさわしい道路／街路を造るかと言う点に端を発している。

道路の通常の走行に際して、観光交通に対して、あるいは歩行者に対して、生活者にとっての「奈良」にふさわしい道路とはいったいどんなものであろうか。その一つとして「奈良らしい」道路、奈良の個性を反映したような道路とはいかなるものかを考える。このような「奈良らしさ」を具体化することがこの研究の本来の目的である。

道路の構造は、道路構造令等によりマニュアル化され、自動車の走行のための強度、曲線や勾配の設置等制約条件も多い。材料等の制約からも変化の与えにくい構造物であり、それ単体で語られることも少ない。このためともすれば変化の無い単調な構造物ができあがる。では設計者、施工者はどこにそのオリジナリティーを発揮し、その地域の個性を育成していけるのか。独人の心掛けが「奈良」にふさわしい道路を具体化して行くであろうけれど、それらを効果的に結び付けることが肝心である。

さて、なぜ今更ながらに「奈良らしさ」とは？、などという禅問答にも似た問いを発することになったのだろうか。最近、どの街へ行っても同じ様な町並みが作られている、という話をときどき聴く。たしかに、新しく整備された町並みの写真を見ると舗装や、街路灯など共通の材料が用いられていたり、街路線形、植え込みや附属物（ファーニチャ）などの空間構成が同じであったりする。町並みをきれいにしたい、機能的にしたいとまではその街に住む人、関わりのある人、全ての人々に一応共通する要求であろう。結局、一度手を入れるなら総合的にと、あれも、これも式に、考えられること全てを取り入れると同じ町並みができあがる仕組みになっているように思える。だれしも、自分の街が、仕事が１番であると言いたいし、言わせたい。原因の如何によらず結果が同じであるのは、このようなところに原因があるのではなかろうか。

では、１番がダメ、総合的がダメなのだろうか。そんなはずはない。この話はむしろ、「蛇足」の話に近い。蛇に足を描いたらもはや蛇の絵ではなくなるというあれである。蛇を描くことに決めたら蛇を描けば善いのである。蛇を描きたいということが「モチーフ（モチベーション）」となっているのであるから。ここでいう「モチーフ」とは「動機」のことである。計画の「モチーフ」をもう一度考え直すことによって「奈良らしさ」を具現化することができるのではなかろうか。

「モチーフ」に対して解決の方向を示すことを「テーマ」を与えると呼ぶことにする。動機となった原因に対する解決のことである。「蛇足」の画家に取っての主題、即ち「テーマ」は、「蛇」である。が、真の「モチーフ」は主人に対する功名心であろう。我々の真の「モチーフ」は地域計画における画一性の排除であろうか？必ずしもそうではない。我々は「テーマ」として「奈良らしさ」を選んだにすぎない。我々の「モチーフ」によれば、本質的には、たとえ結果的に全く同一の街がそこに出現したとしてもいっこうに構わないはずなのである。

そこで、とりあえず「奈良らしさ」の構造（「ストラクチャ」）について考えてみることにする。とにかく「奈良らしさ」を組み上げてしまおうという試みである。若干、乱暴で　はあるが、「奈良」に関係するものはなんらかの意味で「奈良らしさ」の部材（パーツ）となっているであろう、との仮説に基づく。「奈良らしさ」との関係を同定することによって奈良らしさそのものを浮き彫りにする。

「奈良らしさ」を構成するための要素（「エレメント」）となるものは何か？例えば「奈良」から想起されるものを考えよう。「奈良」という言葉から思い浮かべられるものが必ずしも「奈良らしい」とは限らない。奈良にあるからといって奈良らしいとは言えないし、また、奈良以外にあっても奈良らしいと感じさせるものもあろう。奈良にしかなくても奈良らしいと感じさせないものもあろうし、奈良以外の何処にでもあったって奈良らしいものもあろう。

このように「奈良」から想起されるものを「エレメント」と呼ぶことにする。

「エレメント」の中に、あるいはそれ以外かもしれないが、「奈良らしさ」を構成するもの、即ち

「奈良らしさ」の部品を「奈良らしさ」の「パーツ」と呼ぶ。「パーツ」は「奈良らしさ」になにがしかの寄与をしているものと考えられる。ここでは、これらの「パーツ」がどのようにして、あるいはどのような意味において「奈良らしさ」に寄与しているのか、その役割を考え、その「奈良らしさ」全体の構造を把握するようなアプローチを念頭において作業を進めた。

しかし、「エレメント」をみつけ、その各々が「パーツ」であるかどうか判別し、また何故、それが「奈良らしさ」をどのように構成し、その全貌がどのようなものであるかを考えることは、途方もない作業であろうことはすぐに露見する。第一に、我々の「奈良」についての知識はあまりにも乏しく、何にも頼らずに「奈良」について想起する内容はいかに偏ったものであるか。第二に、なにものかに頼ることとして、果してそのようにして（まで）想起?したものが「奈良らしさ」を余すところなく再現しえているか。

このようなさまざまの「奈良」の中から特定の「奈良らしさ」をもとめることは至難の技であろう。

我々にとっての「奈良らしさ」というのは比較的限られた立場に立ってのものであろう。まず、観光者として期待する「奈良らしさ」、あるいは自動車を運転して、鉄道で通過したときに感じる「奈良らしさ」。京都育ちの私にとっての「奈良」は、漠然と近鉄電車で南へ向かったときの、田園地帯を抜け、あるいはニュータウンを通り過ぎたところにある大仏と鹿のいる公園としての奈良であった。そこは広い通りのドンツキにあり、また大きな伽藍と五重の塔の見える、若草山から見渡せる範囲を指した。少なくとも、その範囲と立場を直接的にあるいは間接的にハッキリさせておかねばなるまい。

そこで「奈良らしさ」を扱うためにはもう少し別の角度から先に整理してやる必要がある。この整理は「奈良らしさ」を規定づけるもの（「ディフィニション」）であり、整理された結果を「コンセプト」と呼ぶことにする。

「奈良らしさ」を具体化するような計画が実現されたとしよう。「奈良らしさ」を「テーマ」に個々の事業が行われたとする。「コンセプト」まで統一されていても、なお解釈の差により全体としての統一を欠くことになろう。この差を埋める実際設計上の考え方を「アーキテクチャ」設計思想と呼ぶことにする。この段階に置いては「奈良らしさ」は具体的な形態的特徴に及んで示されることになる。

２－２　エレメンツ／パーツとストラクチャー

「奈良」を集合的にとらえたとき、「奈良らしさ」は「奈良」の要素によって、構成されるのだろうか。

「奈良らしさ」は、「奈良」となにがしかの関係は有するように思われるが、「奈良」そのものに直接含まれるようなものではないようにも思われる。例えば、ある地方の風土記は、ある地方についての記述であるが、その地方のためではなく、むしろ中央政府、あるいは中央を介して他の地方のために記されたであろう。あるいは、全国に広くみられる京風料理の類はどこに京とつながりがあるのかまったくわからないことすらある。

しかし、奈良と全く関係がないかどうかを判断するには、「奈良」についていかに経験・記憶あるいは知識があるかということとも密接な関係がある。

ここでは、まず「奈良」に関する知識を網羅的に調べる方法について考えた。この知識をエレメントと呼ぼう。一方、「奈良らしさ」にはこのエレメントがなにがしかの形で関連を有していると考えられる。この「奈良らしさ」に関連を有しているエレメントをパーツと呼ぶ。このパーツがかかわり合って構成していく「奈良らしさ」の構造（ストラクチャー）をあきらかにすることがわれわれの目的となろう。もっとも「奈良らしさ」を具体化していく過程においては、「奈良らしさ」はアーキテクチャー（設計思想）と呼ばれる。

1)　地理学的知識（エレメンツ１）

様々の学問にも地名を索引とした分野が見られる。

地理学においては、まず、世界・日本における位置を示し、地形的条件を明示し、気象条件を考え合わせると、交通条件が徒歩、畜力程度の場合の農業的土地利用に関してのうんちくがえられる。交通路の結節点において交易が行われ、市が立ち、町を形成する。街道や町には自然発生的な形を踏襲したものと、コントロールされたものとが見られ、後者は、都の大路を受けて平行に走る街道、条里制の名残、前者では古代の水際線海抜７５ｍの線をはしる山辺の道等。

地誌2*)の概要を示す。辞書的、羅列的に検索語に

したがって「奈良」の記述がなされる。

ここでとりあげたのは、全国にわたって編纂された地誌の一巻で近畿圏の一部を対象としたものである。さらに「奈良県」という行政区分に従って整理された1編である。大きく2部によって構成され第1部では奈良県全般にわたって、第2部では各都市あるいは集落に対して各論として述べられている。

第1部と第2部で取り上げられた項目はほぼ同じでありこの意味において両者の記述は相似である。但し第1部において記述された全体に対する内容の内各論でも同様なもの、共通のものは捨象（スクリーニング）される。第1部で取り上げられたうち、全県を代表するよう特別な部分を中心とする記述、例えば奈良市についての記述は逆に再述され、結果的に強調されている。

取り上げられた項目は大きく5つで、その内の1節地理的性格は全体と部分とを媒介する作用を持ついわばレンズ的性質である。終節の地域区分は全体のまとめとして位置づけられる。終節は記述の分量からするとむしろ付け足しといってもよいぐらいであるが奈良の範疇を特定すると言った意味で我々にも興味深い。いくつかの分類が紹介されるが、いずれも県西北部の1／4を占める奈良盆地（国中平野）と南部を占める吉野（山中）とを中心に分けられている。第2部の構成のマップとして、本書の視程を明らかにするものである。この研究においても奈良は何処を指すかと言った議論がなされたがこれとの対比としても興味深い。県による地域区分と異なる行政区分（郵政等）も紹介されている。

あとの3節は歴史的背景、自然、及び人文である。人文の項が最も記述の分量が多く本書の中心的記述がこの項にあると推察される。この項は①産業・交通通信の人間同志の関わり、②観光、地域開発の人間の志向・指向・嗜好、③人口・集落及び④政治・文化にわたっている。

記述の中心はやはり奈良市にある。現奈良市街は平安期以後大社寺を中心として残存した旧都のはずれを中心としているがこの地域を中心とした記述が多い。これは、現在の人口等を含む奈良市の規模が他に比べ大きいためである。しかし、この観点からすると記述の密度が最も大きいのはむしろ飛鳥を中心とする地域であると言える。

奈良、飛鳥に共通する記述のポイントは観光である。現在はその遺構しかなくともそこにあった都の肌理の細かさ、スケールの大きさを伝える風土の存在が多くの人を訪ねせしむ環境を形成している。

奈良の地理学的コンセプトは南北軸を中心にした相似な対比として捉えることができよう。飛鳥に対する国中平野（奈良盆地）、平城京に対しては吉野を含め、奈良市に対する奈良県全域が対応するであろう。ここで核となる、飛鳥、平城京あるいは奈良市が観光の拠点であるなら、それ以外の地域に対して観光と対峙させた概念が必要となるかも知れない。

地理的なテーマはハーモニーであろう。いかにレベルの異なる事項を配列よく検索させるか、わかりやすくするか3*)が問題となろう。この空間の中でその意味と位置評定をすることができる地理的構造をハッキリさせることが肝心であろう。

2) 歴史学的知識（エレメンツ2）

地理学的知識を補完するものとして歴史学的知識を選んだ。特に奈良の場合、首都として歴史の表舞台に立った経験があるだけに、パーツが多く含まれているものと思われる。

時間を主軸とした空間的構造の把握が歴史である。ここでは「奈良県の歴史」永島福太郎著4*)を中心にみて行く。

歴史に関する記述は時間の変遷に従い、ある時点についての資料は少しづつ増加するが、しかし、検証に供する事のできる資料は自然にあるいは意図的に減滅していく。その点かつて都であった奈良には数多くの資料が集められ残された経緯があり、都であった時分の資料は絶対数が多かった分だけ豊富であろうと考えられる。このことからも判るように奈良に関する記述の特徴は一般には8世紀以前の記述が多いことであろう。

この時代についての記述は朝廷、豪族といった都の人々による記録、伝承によるものの他、発掘調査等により補足されるものもある。また記録と言うよりも、比喩的にあるいは象徴的に寓話、昔話として伝承されたものも含まれる。具体的には、「誰がなにをした」かは、「何がどうなった」との対応によって把握される。事実と可能性による補足は混同してはならないが、後者は時に重要な意味を持ち我々の行動に事実以上に影響を持つことがある。5*)（和辻）

奈良の歴史の流れを大きく奈良時代以前と平安時代以降で分けて考える。奈良時代以前においては言うまでもなく比較的広義の「奈良」に政治的中心が永くあり、その舞台装置として機能した。平安時代以降はその意味では舞台裏として機能している。興福寺・春日大社等の社寺の隆盛とも相まって、都を通してその文化は全国に影響を持っていたと考えられる。

さて、奈良時代以前はさらに平城京の時代と飛鳥に中心があった時代に大別できる。「なら」は盆地の北側を主に指すようであるが、我々にとって「奈良」は「飛鳥」を除いて考えることはできない。万葉集が「奈良」と関連して連想され、その中にも多くの「飛鳥」に関する記述を含むこともその一因であろう。

奈良らしさの歴史的構造は対比によって明らかにされた。全国レベルでみたときの奈良の図性（地性に対して）がここにある。奈良と飛鳥が対局をなすと同時に奈良に限って観たときの両者は時間軸上での地と図の関係の図をなす。この場合、図に対する地が弱いときには逆転現象が起こる。その意味では陰と陽の関係であるとも言える。

さて歴史学的コンセプトはこの陰陽を中心として

展開されるであろう。

この陰陽の織り成すメロディーが奈良の歴史的なテーマとなろう。いかにメリハリのきいたメロディーとするのか、また霞の中に浮かび上がる五重の塔のような幽玄をいかに演出するのかが課題となろう。

3) 民俗学的知識（エレメンツ３）

歴史の表舞台に対して、いはば舞台裏の民衆の生活習慣は、双対的にパーツが含まれている可能性がある。

奈良の民俗学6*)は民俗用語を中心に整理されている。生活全般にわたってその地方で用いられている、語意に対しその表す意味を羅列的に記述している。大きくは盆地の農村文化圏と山村文化圏に分かれ、これに近代・現代に流入してきた都市文化圏が加わる。興味の主対象は急速に消えつつある農・山村文化圏の民俗であったが、都市文化圏では商慣習、講・座、青年団等の自治組織・集団、宗教行事等があげられる。

構成は総論に続いて衣食住、生産、交通運輸、交易、社会生活、信仰、民俗知識、民俗芸能、人の一生、年中行事、口頭伝承の合計１２章からなる。個人の生活様式から社会的な生活の連携について、またその過程における基本となる前提条件、約束事について、時間単位は一日単位から、年毎に繰り返される生活パターンについて述べられている。歴史的にその土地において洗練され続けてきたそのような単位の繰り返しについての記述である。

現代に継承された町並み、家並の中の形態的な特徴は小屋根を持った大和棟等として散見することができる。しかし、服飾や食生活の上での習俗は日常の生活ではほとんど絶滅したと言ってもよいのではないかと思われる。

奈良の「カイト」は社会生活の上で全国的に知られている。かつて道路（街道）・河川の保守等の労役は周辺集落の住民に義務として課された。奈良においてこの地縁「カイト」集団の結束は固く、血縁集団を基礎とする「ウチワ」集団と対比され、社会的基礎集団として認知される。「カイト」は「垣内」であり自衛独立した一つの村を為すための単位である。

民俗学的コンセプトは人間の生活にかかっている。ここで見いだされた時間の単位は人間の生活のリズムを整える。

３．「・・・らしさ」の条件

万人に共通項として「奈良らしさ」は存在するか。

「・・・らしさ」を考える場合、「・・・」の対象とするところは、設計上、はっきりと与えられていなければならないように思う。前節にも触れたが、この研究では必ずしもこの点はっきりされていない。インセンティブを与えられる社会集団、または、「・・・」の範囲についての留意点をまとめる。

1) 奈良の経験・記憶

奈良についての知識を獲たときに何に反応して奈良の知識としたか。例えば、新しい(modern)に対して伝統的な(traditional)といったイメージや、同じ伝統的な町でも、京都などに比べて小さい町である等は日本人でなくとも反応する。しかし、この町が女性的な町である、というのは、この町に対するイメージ、あるいは、判断のベースとなる経験や知識により異なる。

2) 奈良らしさの学習

一般的な観光において、伝統的な建造物である寺院や神社等はよほど知識がなければ、せいぜい２～３を観て飽きる。形態的、様式的な差異は、指摘できても、イメージ処理されたとき、同じものとして、あるいは、似たものとして扱われることが多い。

ところが、知識に裏付けられた、然るべき視点を与えられたとき、はっきりと個々が別れて認識され、以後の検索が容易になる7*)。

3) 奈良を点で追うか、線・面でみるか

マクロに奈良をとらえたとき、例えば県としての奈良は47都道府県の４７点の内の１つである。よって、奈良県は人口・面積等、日本の１％を占める、のようにとらえられる。奈良市・奈良駅としても同様である。

ミクロに奈良をとらえると、例えば、地図が描ける。町があり、山があり、道路があり、・・・という具合になる。

実際には多くの場合、歩くにせよ、自動車にせよ線上を移動しながら観察する事となる。回遊型とも言える。

4) 観光者と居住・従業者

視点が外にあるか、内にあるかによって奈良に関わる立場が異なる。また、関わる頻度と、行動半径の広がりによっても違う。観光者は元に戻れることを前提に見える範囲で行動し、居住者は多くの場合、以外に普段から関わりのある範囲のみを行動半径としている。

5) 年齢

一般に高齢になるほど経験・記憶や知識は多くなる。一方、イメージは固定化され、変化を許容できなくなる。すなわち、知覚による情報より、経験・記憶により行動しようとするため。

6) 移動手段

徒歩と自動車では、移動速度が全然違う。受容される情報の質も量も異なる。鉄道やバスの利用もまた、移動する２地点間とそれぞれの乗降地点付近では密度が全然違う。駅と駐車場は町の両端にあることも多い。アプローチが違う。

7)

4．「奈良らしさ」の具体化

奈良等観光地において、いわゆる「アンノン族」は、雑誌・観光ガイドの記事・標題等にうまくインセンティブを与えられたと考えられる。これらは、「・・・らしさ」が、うまく総合された表現として特筆されるべきである。

「奈良らしさ」の具体化プロセスを腑観・抽出・対比・合成の４段階に対応させる。

腑観は、モザイク技法と対応する。個々の点（エレメント）にとらわれず、全体をある程度離れて眺めると「奈良」が浮かび上がってくる。この際、個々の点がある程度細かくなければ、肌理が揃い、数がなければ成功しない。また、浮かび上がるものが具象に近いことも大切だ。

但し、これを表現することは難しい。結局、絵図や、文章を駆使することになろう。

抽出はスケッチ（点描）技法と対応する。認知された主要なパーツを全体の構成がわかるように配置する。認知地図等がこれにあたるが、意味的側面を重視した注釈等を含めるとわかりよい。8*)中井

人は自分の知識や経験の記憶と比較しながら判断している。「奈良らしさ」は、「京都らしさ」や「大阪らしさ」等とも比較されることにより形成される。「奈良らしさ」の特質はその文化を最も後生に残した時期にギリシャ～オリエント文明との対応関係が見られること9*)等にも現されている。また、日本のように盆地と盆地が分水嶺に阻まれそれぞれ独自の文化を育んだ時期が見られることからの比較10*)11*)等の視点を様々設定できる。

最後は、ここに「奈良」から抽出されたエッセンスが、それぞれなにがしかのインセンティブを与えることに注意して、これらを合成することになる。

エレメントを集める前に、「奈良」から、どのような言葉が連想されるかメモを残した。大仏からは大きさ、鹿－公園－子供からはひとなつこさやおとなしさ、仏像からはやわらかさあるいは気性の激しさ等記されている。また、シルクロード、国際性など、この時代に日本に渡ってきた文化の形をデザインコンセプトとして採用してはいかが、かと漠然と考えていた。

大仏の大きさは絶対的なものであるのか、相対的なものであるのか。何を対照としてバランスをとるのか。鹿・・子供のどのような部分がデフォルメ（強調／捨象）され、具体的な形態的的特徴はいかなるものか。仏像のどの曲線が活かされるべきなのか等々。

デザインコンセプトのモチーフをはっきりさせ、目的に沿ったインセンティブがえられるものか、の評価を経て、アーキテクチャーに昇華させることが寛仁であろうと考えるにいたった。

謝　辞

この研究は、平成元年度に、研究会を組織した。貴重な議論、ご指導を戴いた、福山大学工学部井上矩之教授、機会を与えていただいた、中央復建コンサルタンツ斉藤卓二、岸野啓一両氏に、特に記して感謝いたします。但し、本研究についての誤謬、不備等は全て筆者の責に帰すことは言うまでもない。

参考文献

1) K.E.ﾎﾞｰﾙﾃﾞｨﾝｸﾞ:ザ・イメージ、誠信書房、1962.
2) 日本地誌研究所編:日本地誌第13巻、奈良県、二宮書店、1988.
3) K.ﾘﾝﾁ:都市のイメージ等
4) 永島福太郎:奈良県の歴史、山川出版社、1971.
5) 和辻哲郎:古寺巡礼、岩波、1919.
6) 保仙純剛:日本の民俗29奈良、第一法規出版、1972.
7) 5)に同じ
8) 中井久夫:概説-文化精神医学と治療文化論-、岩波、1983.
9) 5)に同じ
10) 樋口忠彦:景観の構造、技法堂、1975.
11) 米山俊直:小盆地宇宙と日本文化、岩波、1989.